

天安門の惨劇

押し潰される民主化の波

When the Tide of Democratization Was Suppressed



第3位



6月4日未明、天安門広場で繰り広げられた惨劇をテレビ映像を通して世界の人々が目撃した。人民を守るべき人民解放軍が人民に向けて銃火を放った——誰もが、その歴史的瞬間に衝撃した。

天安門事件は、20世紀の世界史的事件のなかでも、ひとときを歴史に深刻な影を落とす衝撃的な出来事といえるのではないか。

20世紀は戦争と革命の世紀といわれるが、その20世紀が終わりに行く今日の時点で、軍事力によって覇権を維持するとか、国家を維持するという時代はますます遠ざかる方向にある。もはや

書き下ろし、その足でパリに飛び、さらに東西ヨーロッパの諸国を回ってきた。その旅行の途中、今回の中国の民主化運動の理論的指導者である厳家其氏（前中国社会科学院政治改革研究所所长）とパリで会見する機会があった。厳家其氏は、この9月21日にパリで新しい民主中国を求めて旗上げされた国際組織「民主中国陣線」の議長に選ばれた

軍事力の大きさがものをいう時代ではなく、経済力があるものをいう時代になってきた。にもかかわらず、一方の革命というものが内部から掘り崩されていくことに對して、軍事力によってそれを支えたという一つの悪しきパラドックスを感じさせるという意味でも、天安門の出来事はまさに20世紀的事件だということができるだろう。

では一体、天安門事件の本質は何であったのか。それはやはり社会主義、あるいはマルクス・レーニン主義、そしてまた共産党の一元独裁体制への根本的な反逆であったというのが私の理解である。そうであるがゆえに、鄧小平体制としてはこれを許容できなかったのである。

この天安門事件について私自身はそうした前提で最近「中国の悲劇」(講談社)を

人だが、その厳家其氏に今回の事件の本質は単なる民主化運動なのか、それとも共産党体制への反逆なのかを聞いてみた。すると彼は、私の意見と全く同じだと言っていた。厳家其氏は、将来は連邦制の形成ということまで含む国家改造案をスローガンとして打ち出しており、しかもそれは単に外部に亡命を余儀なくされた知識人のみならず、中国に残っている反体制知識人や学生たちの共通した政策目標でもある。不幸にも中国は建国40周年という歴史の大きな節目を戒厳令下で迎えたわけだが、そうせざるを得ないのがまさに中国の現実であり、さらに大きな問題は、天安門事件が提起したもの、あるいは鄧小平ワンマン体制への批判、中国共産党の一元独裁体制への批判というものが、あれだけの流血の代償を払いつつも何一つ具体的に解決していないことである。ということは、あの大衆的な盛り上がりを見せた出来事の根がそのまま依然として存在しているということであり、いわば中国社会には大きな爆弾が仕掛けられているといっても過言ではない。

天安門事件は、革命国家、社会主義国家のコストの大きさを全世界に知らしめた。あれだけの犠牲や代償を払っても、革命を経ない他のアジア諸国、とくにNIE Sとの間に著しい経済格差が生じてしまったことを含めて、この事件はまさに20世紀の一つの大きな現実を象徴した事件ではなかったのだろうか。

中山嶺雄(東京外国語大学教授) ■ 21 ■

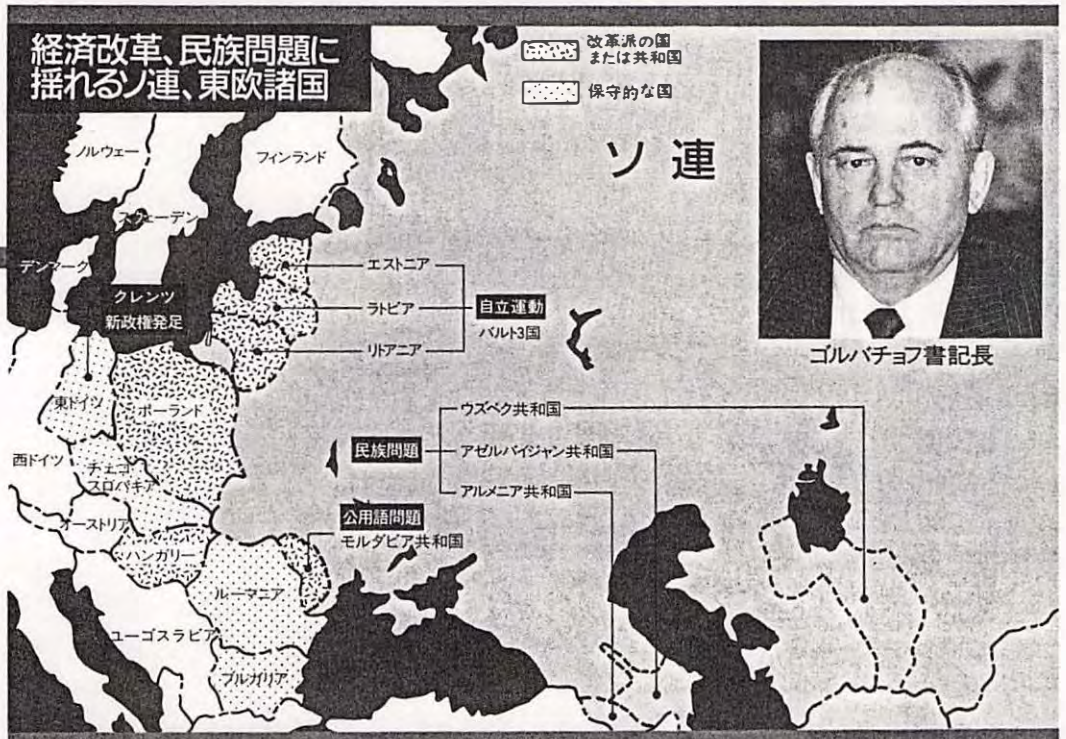
社会主義の崩壊

それでもペレストロイカは前進する

And Yet, Perestroika Goes On!?

第6位

新しいソ連を再建せんがために、ペレストロイカを掲げて精力的に上からの改革を進めてきたゴルバチョフ書記長は、その輝かしい外交的成功にもかかわらず、内政的には民族問題の噴出などによっていま危機の瀬戸際に立たされているといわれる。が、私自身は必ずしもこのゴルバチョフ危機説には与しない。その理由は、今日のソ連に



断するわけにはいかない。やはり今日のソ連はゴルバチョフ体制のもとで上からの改革を社会の底辺まで浸透させていかざるを得ないだろう。もとよりペレストロイカの一歩大きな影響はイデオロギー的な自縛から解放されたことであり、ソ連の知識人や一般民衆の間ではかなり自由になつた。しかし、ソ連の

ゴルバチョフ書記長が推し進めるペレストロイカ(改革)はソ連の政治・経済・社会体制のみならず、衛星国である東欧諸国に深刻な影響を与えることになった。早くから経済改革を進めてきたハンガリーでは社会主義労働者党(共産党)のほか複数の政党による政治体制をめざし、ポーランドでは統一労働者党(共産党)の一元独裁体制にかわって連帯を中心とする複数政党政治が実現した。東ドイツやルーマニア、チェコスロバキアなど、"改革"に保守的な国もあるが、いずれその波に巻き込まれるだろう。一方、本家のソ連では民族問題(バルト3国の自立運動、アルメニア共和国とアゼルバイジャン共和国の対立、モルダビア共和国の公用語問題など)がソ連の連邦共和国体制を動揺させている

経済が活性化し、社会のシステムがソフト化するまでにはまだまだ多くの試練を経なければならぬだろう。当面のソ連にとって一番重要なポイントはおそらく民族問題だろうが、これは社会主義の宿痾のようなもので、とくにソ連のような多民族国家においては今後共その処理如何が体制を揺さぶることになるだろう。しかしそのことによつてソ連邦を解体するわけにはいかないと、今日ソ連のジレンマがある。そういう状況の中で、ゴルバチョフは後ろを向くことを奪われた形で前進していかざるを得ない。従つて、ソ連を徐々にソフトな社会にし、西側に受け入れられやすい形に変革していくことによつて、現在の社会主義体制の危機と経済的停滞、そして深刻な政治的動揺を防止していかざるを得ないのではないか。

おいてもしゴルバチョフを失うようなことがあれば、ソ連社会は崩壊へ向かつて大変な混乱に陥ると思うからである。それを避けようとする凝集力がいまゴルバチョフを支えている。中国の江沢民総書記など比べてもゴルバチョフには明確な指導理念があり、外交哲学があり、そして多くの民衆に訴える力を持っている。ソ連にとつてはまさにかけがえのない指導者といえるのではないか。

今後、ゴルバチョフは内政的にはとくに民族問題などに悩むだろうし、また国際的にも東欧諸国が急ピッチで西側化する動きの中で試練に曝されるだろう。しかし、だからといってペレストロイカを中絶するわけにはいかない。やはり今日のソ連はゴルバチョフ体制のもとで上からの改革を社会の底辺まで浸透させていかざるを得ないだろう。もとよりペレストロイカの一歩大きな影響はイデオロギー的な自縛から解放されたことであり、ソ連の知識人や一般民衆の間ではかなり自由になつた。しかし、ソ連の